「諸国百物語」成立の背景

太刀川　清

一

百物語とは百物語怪談会のことである。暗夜に人々が集い怪談に興じる戯れである。戯れといっても長い歳月のうちにいつか享楽的な催しに展じたもので、そのさきは怪を祈る真面目な習俗であったやら知れない。

百物語の起源はと問われるなら不明というより仕方がない。「和漢怪談評林」（正徳年間）に「百物語といふ事何の代より始たると云伝たしかならず。又何人の始めたりと云事もなし。案ずるに中古よりの事なるべし。古き書には見え侍らず」とあって、そのさきを明かにしない。なにを根拠に中古を起源というのであろうか。ただ「嬉遊笑覧」（文政十三年）には「百物語といふことも是巡物語ながら怪事を語る戯なり」（巻九・言語）と誌して百物語のそのさきを巡物語にあてようとする試みもあるがこれもさだかでない。巡物語とは中世の法文集「三国伝記」所収のものによると、法談に集った人々が宵の月待ちの間を慰め合うために語りあった法文ならぬ雑談であったようである。

「古き書には見え侍らず」という通り、百物語ということばをはじめて見るのは江戸時代に入って萬治二年刊行の「百物語」なる書名であり、また同じとし刊行の「御伽物語」（とのゐ草トモ）の「百物語して蜘蛛の足をきる事」（巻二）の条の百物語の催しが最初であるが、ここでもその起源にはふれず、すでに既存の習俗としてあらわれてくるのである。

昔より人の云ひ伝へし怖ろしき事怪しき事をあつめて百話すれば、必ず怖ろしき事怪しき事ありと云へり。百物語には法式あり、月暗き夜、行燈に火を点じ、其行燈は青き紙にて張り立て、百筋の燈心を点じ、一つの物語に燈心一筋づゝ引き取りぬれば座中漸々暗くなり青き紙の色うつろひて何となく物悽くなり行くなり。それに語り続くれば必ず怪しき事、怖ろしき事現はるゝ

とかや。（伽婢子巻十三、怪を話さば怪至る）

これが百物語の法式の大概であるが、なおその場によってはまた別のしきたりもあった。「面々皆青き小袖を著て」（伽婢子）臨んだり「灯を一筋づつ消しては鏡をとりて我顔を見る」（怪談老の杖）といった趣向もあってまちまちであるが「宗祇諸国物語」（貞享二年）で伝えるものは一段と詳しい。

此の事の作法とて人のいひしは、一間なる所に、其の連衆こもりぬ、戸の口にひしと鎖をおろし燈に灯心百筋入れ、青紙を以て闇燈に用ゆ、扨座中のひとりひとり両手のおや指を一つ所によせてしとどくゝり、働く事を得ざるやうに相はかる。（巻三・話怪異）

親指を一つ所によせるのは魂を奪われまいとするつもりであったか、いずれにせよ怪談会である以上それに相応しい雰囲気をかもし出すために案出された当世人の知恵の産物であったであろう。それに雨そぼ降る暗夜という自然の景物まで添え加わるのである。

かかる法式そのものがすでに怪談の素材となることは勿論であり、加えて百話に及んで怪事が起こるということになると怪談としてなお相応しいものとなる。こうして百物語は怪談文芸に好んでとりあげられるところとなったのである。

二

例によって無聊の徒が百物語をはじめて、九十九に話がすすんだ。一座のものが酒杯をかわしながら不思議のあらわれるのを待っていると、天井から「ここへも一つ」と大きな手が出た。居あわせた一人が刀を抜いて切りつけると蜘蛛の手が三寸ほど切れて落ちたという。「御伽物語」巻四「百物語して蜘蛛の足をきる事」の百物語の場面である。この作者は勿論怪談のつもりでしるしたのであろうがこれを笑話と解せば解せなくもない。天井の化物が下の酒宴をみて「百噺するうち

ばけものは待ってある」（柳樽、十二）わけにいかず、「ここへも一つ」と大きな手を出して酒を請求するなど立派なおちをもった笑話である。後日の百物語を素材とする小咄の類はすでにこのへんに胚胎するのであろうが、それを切りつけると蜘蛛の手が落ちる。そこで怪談となるのである。こうして百物語の催し自体その結果いかんで怪談ともなれば笑話ともなるという性格をもっていたのである。同じ蜘蛛の怪でこの話と同趣のものに「曽呂利物語」巻二「足高蜘蛛変化の事」というのがあるが、その切り落されたものがこれは足あれは手であったという違いだけではなく「六十許りなる女鉄漿をつけ髪のかすかに見えたる四方に乱し、彼の男を見てけしからず笑ふ」と変化のものが姿をあらわすと、それにもまして怪談となることはいうまでもない。

「御伽物語」と「曽呂利物語」のこの二つの話、どちらをどちらの粉本と考えるべきであろうか。(注1) それはとにかく、ほぼ時代を同じくして百物語を扱った二つの態度があるのに心ひかれる。そしてこのことは怪談と笑話がいつも同居していたことの証左でもあるのである。

一体、江戸時代はじめにあっては、今日怪異小説と呼ばれている作品は揃って『咄本』として分類されているのが書籍目録の通例である。たとえば「増補書籍目録」（寛文十年）や「古今書籍目録」（延宝三年）では「伽婢子」（寛文六年）も「曽呂利物語」も「醒睡笑」「仕方咄」同様に『咄本』の中に分類されていた。それが『咄本』と訣別して一類をたてるのは貞享二年の「広益書籍目録」からである。なぜに『咄本』に入れて分類するかといえば、怪異小説が単に諸国の奇事異聞を蒐めたものといい、また怪談会で話されたものの集録であるという序跋をそのまま信じてのものであるが、つまるところそれが雑話集であったからにほかならない。そしてその雑話の集成がやがて怪談に結びつくものと笑話に結びつくものに二大別されていくのも自然のなりゆきということになる。

そのことから百物語を名告る作品として「百物語」と「諸国百物語」が江戸時代のはじめにあらわれたことは理由のないことではない。

三

その一つ、「諸国百物語」は延宝五年四月の刊行である。序文のおわりには次のようにいう。

当時すでに百物語と云双紙あれども、わらんべのもてあそび草にして出所正しからず。今此双紙はその国々の諸人も聞および見及びたるはなしの證拠ただしきをあつめ五巻として諸国百物語と名付くとしか云。

いうところの「百物語と云双紙」とは萬治二年刊の「百物語」を指す。そして作者は「百物語」所収の説話を「出所正しからず」とし、それに対して「諸国百物語」のそれを「證拠ただしき」ものなりと自負するのである。

一体、「百物語」の説話を出所正しからずというわけは、たとえば「一休諸国物語」の作者が「一休はなし」や「一休関東はなし」の作を指して「それ世上に同名のはなしの書其類ありといへども是をもって実義ならず」（一休諸国物語、序）と評したのと同趣であり、つまり「聞きしにまさるから口」（一休ばなし・序）「いつわりまじりのむかし物語」（一休関東はなし・序）というかるくちでありいつわりばなしと同義と解しているのであって、いうところの『咄本』なのである。

万治二年刊の「百物語」は百物語を名告る最初のものであったが、その名に百物語を名告り、話も上下巻各五十話と百話を収めながら怪談集ではなかった。百物語といったのはさまざまの話を百話集めたという位のつもりであったかも知れないが、怪談とは凡そ似ても似つかない雑話集であったのである。

例によって人々集って「百物語をしてこわきもの出づるかとこころみて後の世のためしにせむ」と怪談会をはじめたが予想に反して百話になっても何の変事も起こらなかった。人々は昔の人はなんともたわいのないことをいったものかと嘲笑していると、その座にいたこざかしき男が「ただ今咄し給ひし其中にこわきもの出たり、かの奴がきたりし衣裳の色々を見給はずや牛首布かたびら、のりこはしのしぶかたびらみなこわきものなり、おさまりし此御代にこれよりこわきはなし」というのである。

それは下巻の最後の話で車の奴鑓竈兵衛のいでたちのことで「其たけ六尺あまりの男上にはふと布のしぶ染に七八百がのりをかい、皮のふと帯しかとしめ、熊の皮の長羽織、真直な大小十文字にさしたるけしき身の毛もよだつばかりに候」といったそのさまでこわきものとは怖しいものではなく、堅いものの意で語呂合わせと酒落たものである。はじめおわりをこんな形でおさえたこの「百物語」は勿論怪談集ではなく「醒睡笑」や「きのふはけふの物語」に類する笑話雑話集であったことはいうまでもない。

「諸国百物語」が怪談集であるためには、「伽婢子」の例にならっても「證拠正しき」説話を収めるものでなければならなかったのである。そして後続の百物語

が怪談集であるために是非とも一言しなければならなかったのもここであった。「それが中に艶なるあり、哀なるあり、おかしきあり怪しきあり、おそろしきあり、是彼證拠正しきをぬき書きして」というのは「諸国新百物語」（元禄五年刊）であり、「あやしき物語どものそれが中にも出所正しきをのみ集て」編んだのが「太平百物語」（享保十七年刊）であった。

なぜこれほどまで出所や證拠に固執するのか、怪異小説なる故に、それが怪異の実在を読者に訴えるに効果あることを考えてのことは勿論であろう。しかしそれにもまして混沌とした説話の世界にわずかに見せたジャンル意識のあらわれであったのである。

「諸国百物語」におくれること三年、延宝八年に「咄物語」なる一作が出た。咄（はなし）と物語を一諸にしたかの、この書名には作者の意図するところが含まれていた。咄と物語の区別を明かにしようというのである。序文には、つれづれなる雨の夜を物語をして慰めあおうと作者の幸佐がまず物語をはじめた。いわずもながの百物語の形式である。幸佐の話がおわるや居あわせた人達は大笑いして、

物語せんと申さるゝ程に、耳を澄し聞居たれば思ひの外の戯言なり。さやうの事を咄とこそいふなれ。世の噂にもまことしからぬ義を人のかたれば、夫はなしにこそあらめといふにて弁へしられよかし。

と諭される。咄といわれたそのわけは、「昔去所に夜更て盗人来り」ではじまるこの話で具体的な時、所を明かにしない。かわってする物語なるものは「朱雀院の御年平将門といふ人有」ではじまる一話はその時、所を明かにする。そして「かやうの出所有事を物語といふなり」と出所正しき、證拠正しきか否かを物語と咄の区別の根拠にしているのである。

この考えに従えば「諸国百物語」は物語であり、怪談集であるためにも、證拠云々をもって咄とは区別されなければならなかったのである。ちなみに貞享二年の書籍目録では「諸国百物語」は『物語類』に「百物語」を『咄の類』に分類していることはいうまでもない。

他方、百物語に諸国なる語を冠せることも意味ないことではなかった。諸国とはその話を諸国にもとめたという単純なものではなく、近世人の知識的意欲を象徴するものであるが、その諸国を書名に付すことは、一にこれが諸国物語をものす意識にも通じるのである。諸国物語につけば「一休諸国物語」がある。刊年の明かでない本書も寛文十一年以降延宝三年以前のものであることは確からしい。一休宗純の逸話を背景に諸国行脚に於ける見聞に託して諸国の話を誌すのであって、いうなら旅中に於ける見聞談であり、旅という体験を通して作られたという姿勢をみることが出来る。「一休諸国物語」につぐ「宗祇諸国物語」（貞享二年）の刊行もそう遠いさきのことではなかった。

百物語にして諸国物語である「諸国百物語」は居ながらにして諸国行脚という旅の体験をももち得ようという趣向と見てよい。「今此双紙はその国々の諸人も聞および見及びたるはなし」（諸国百物語・序）というのは、居ながらにして諸国物語をものす意識のあらわれにほかならないのである。

四

「諸国百物語」の紹介はかつてなされていた。(注2) しかし中村幸彦氏の紹介された九州太宰府天満宮の御文庫のものは惜しいかな巻一を欠く零本であったらしい。しかるに近時、別の一本を国立東京博物館の蔵本の中で見る機会を得た。天満宮所蔵のものは大本五巻五冊本であるかにいわれるが、管見のものは五巻十冊（各巻二冊）、しかも形は半紙本である。奥には「延宝五丁巳卯月下旬京寺町通松原上ル町菊屋七郎兵衛板」とあるのは天満宮蔵本と一致するようである。思うに管見のものは半紙本十冊という体裁から刊記をそのままにした改版であったであろうか。刊記に入木のあとありやと見るにそれもさだかでない。百話をもって完とするのは文字通りの百物語であり、加えてすべて怪異談ということは名実ともに百物語の書名に相広しい斯界の第一作であったのである。

「諸国百物語」は序文に誌すところによると信州諏訪の浪人武田信行が雨夜のつれづれに三四人の伴と百物語を行った際のはなしを書きしるして梓行したものであるという。

はなし九十九に及び灯心もいま一筋になったとき天井で大音響がして灯が消えた。すかさず信行が落ちたものをとりおさえて、明かりをつけてみると大きい衣服であった。人々はひときは大笑いするのである。

天井より落ちた怪異が大きい衣服であったというのは、何のことない笑話に近いもので、たとえば「当世軽口うかればなし」（貞享二年版書籍目録所収）に

今宵百物語をして見んとてはなしを仕いだす。大かた九十七八はなすと案のごとく二階なりわたる。さてこそと思う処に天じやうのいたふみやぶり大きなるあしだしたり。あはやと云ふてにげけり。のちにきけばけ物にはあら

ず、下おとこのたきぎをとりにあがりしが、とりはずしておちたるとなり。
（巻下、百物語の事）

と似たようなものであるが、違いは恐れて逃げ出す人々と、恐れずそれをとりおさえた信行の豪胆さにある。

かつての百物語怪談会は多く練胆の意図があっていまだ享楽的な催しにだけにとどまるところではなかった。「拾椎雑話」（宝暦七年序）に伝える延宝のころの百物語は次のようなものであった。

延宝のころにや、若きとき今宵本境寺の堂にて百物語いたすべき云けるを外聞し先達堂の下にかくれ居たり。案のごとく誰彼来り百物語しけるに、縁の下より手を差いだして足をしかと握りたり。足をとらへられて少しもさはがず小刀にてその手を突き、それより這ひ出て名乗り互に大成云ふに成たるよし

こうして百物語は怪談による胆だめしの格好の場でもあったのである。「それは血気盛んの若人武士などは好ましかる」（諸国新百物語・序）ものであり、時には「中々気弱き者は絶入し、啼きも出づべき計り」（宗祗諸国物語・三）のものもあったりするのであって、つまるところ「是にて人の強弱を見る事」（拾椎雑話、六）が百物語の催しであった。そして殊に武辺ではその豪胆さが大きく賞賛されたであろうし、そうでなくとも胆太き人には必ずそれなりの報いがあったであろう。「諸国百物語」の最終話はそうした態度にもとづくものであるが、百話目は「百物がたりして富貴になりたる事」（巻五）である。

京五条の堀川の米屋八郎兵衛が商取引で大津へ出かけた留守に子供たちが近所の子供を交えて百物語をはじめた。話が四五十になると大方は帰り二三人となり、さらに八九十になると、この家の惣領だけになってしまったが、惣領は「ばけ物のしやうたい見んための百物がたりなるに、むけうなるものなる事也。さればわれ一人に百のかずあわせん」とつづける。百話になって用便にたつと十七八の女があらわれ、われはこの家の主であったが産のため死んだものであるが、あとを弔うものもいない。是非千部経を読んでほしいという。惣領はこの家は貧困故に出来ないと断ると、女は瀬戸の柿の木の下に金子が埋めてあるからといって消えた。翌朝、親の八郎兵衛にこのことを話し、早速柿の木の下を掘ってみると小判百両があったのでこれでねんごろに弔ってやった。それからというものは商売は繁昌し下京一の米屋になったという。

百物語故にめでたく富貴となったのはのちの「御伽百物語」（宝永三年刊）の巻末の「黄金の精并百物語果て宝を得し事」にも通じる一話で、その人の豪胆さが幸いを招いたもので、巻末をかざるにふさわしいものであった。

五

「諸国百物語」におさめられた説話が百物語怪談会の際のはなしをあつめて上梓したものといえながらも、それは仮託であったかも知れない。しかしここに百物語の話が集成されたというだけでも史的意義は認めてよいところである。それだけに作者は怪談会に相応しい話をもとめていたことは「諸国百物語」の話のいくつかが既刊の「曽呂利物語」によっていたことでもわかる。

「諸国百物語」と「曽呂利物語」との間には次のような説話の関係を認めることが出来る。

（駿河国板垣の三郎道げんの物に命をとられし事（諸国百、一―一）
板垣の三郎高名の事（曽呂利、一―一）
（座頭旅にてばけ物にあひし事付三条小鍛治が銘の刀の事（諸国百一―二）
いかなる化生の物も名作の物には怖るゝ事（曽呂利、三―一）
（かわちの国くらがり峠道弥天狗に鼻はじかるゝ事（諸国百、一―三）
天狗の鼻つまみの事（曽呂利、二―七）
（松浦伊予が家にばけ物すむ事（諸国百、一―四）
怨念深き者の魂迷ひありく事（曽呂利、二―三）
（木屋の介五郎が母夢に死人をくひける事（諸国百、一―五）
罪ふかきもの今生より業をなす事（曽呂利、一―七）
（狐山伏にあだをなす事（諸国百、一―六）
狐を威してやがて仇をなす事（曽呂利、一―十）
（蓮台野二塚のばけ物の事（諸国百、一―七）
蓮台野に化物に遇事（曽呂利、三―三）
（下野の国にて修業者亡霊にあひし事（諸国百、一―十）
行の達した僧には必ずしるしある事（曽呂利、二―五）
（出羽の国杉山長部が妻かげのわづらひの事（諸国百、一―十一）
離魂といふ病の事（曽呂利、三―二）
（越前の国永平寺の新発意の事（諸国百、一―十三）
越前国白鬼女の由来の事（曽呂利、二―八）

両書の関係は大凡以上であり、すべては「諸国百物語」巻一に関係する。「曽

呂利物語」の成立について詳しいことはわからないが、「伽婢子」（寛文六年刊）に先だつという考証がある。[注3] それも「伽婢子」の成立にごく近いころのものであったであろうことは、寛文はじめのものと考えられる無刊記の「和漢書籍目録」にはその記載がないからである。

「曽呂利物語」がいかなる性質の説話集であったか、それははしがきで曽呂利という雑談の上手が秀吉の前で語った話を「近習の人々是を書きとめ」たものであるという。秀吉の面前でそのお伽衆の曽呂利が語った伽の話とは思いつきそうな仮託である。しかも「曽呂利物語」所収の話がきわめて語りの口調があったことは「御伽物語」との比較考察から明かであることからして、[注4]「諸国百物語」の作者がここで「曽呂利物語」の話を需めたことは怪談会での話に相応しい語りの表現を期待することが出来ると考えてのことではなかったか。それにまた「曽呂利物語」は「ある夜大樹（秀吉公）のまへにておどろ〳〵しき事を語れとのたまふに十づゝ十に及べり」（はしがき）というところは百物語の形式すらふんでいたのである。

六

さきにあげた「諸国百物語」の説話を「曽呂利物語」のそれと比較すれば、わずかの語句をかえるにとどまり、行文殆んど同じである。ちなみに開巻第一話の「駿河の国板垣の三郎道げんの物に命をとられし事」と「曽呂利物語」のこれまた巻一の第一話「板垣三郎高名の事」を併記すると次のようである。

板垣三郎高名の事

駿河国大もり今藤ときこえし人、府中に在城したまひけるが、ある夜つれ〴〵に家の子らうどうを集め酒宴数刻に及ぶ時、さてもたれか有る、今夜千本の上の社まで行いて来らん、とのたまひければ、ひごろ手がらをあらはす者多しといへども、これは聞ゆる魔所なれば、あへてまゐらんといふ者なし。爰に甲斐国の住人に板垣の三郎とて代々弓矢をとっては隠れなき勇者あり。すなはち私こそ参り候はんと申しあぐる。大もりなのめにおぼしめして、やがてしるしをたぶ。板垣は大剛の者にて少しも恐るゝけしきなく、殿中よりすぐに千本へぞ参りける。頃は九月中旬の事なれば月いとしろく木の葉ふりしき物すさまじき森のうちを過ぎて、(1)石だんを通りけるが、杉の木の上より小さきもの一つひらめきて足もとへ落ちけるが、あやしみこれを見るにへぎ一枚なり。かかる所に何とて有りけるぞと思ひながら蹈みわりて通りけれ。われたる音山彦にこたへ夥しく聞えけるを不審に思ひながら別の事もなくて、上のやしろの前にて一礼してしるしの札をたて置き帰りしが、いづくともなく白きねりのひとへを被きて女房一人来れり。扨は音に聞きつる変化の物わが心をたぶらかすらんと思ひ走りよりて(2)被きたるきぬを引きのけて見れば、大いなる目一つ有りて振分髪の下よりもならべたる角おひたるが薄化粧に鉄漿くろ〴〵とつけたり、おそろしとも云はん方なし。されども板垣少しもたゞよはず何ものなれば、とて太刀をぬかんとすれば、かき消す如く先せぬ。不審なる事ながらせんかたもなく立かへり、大もりの前に参り、しるしを立てて帰りさふらふ御検便をたてて御らん候へとまうし上ぐる。まことに板垣にてなくば、恙なくは帰らじと一同に感じあへり。扨何事にもあひ候はぬかと御尋ね有りければ、いや何事も怪しき事は御ざなきと申す。かかりける所に座敷も隈なき月の夜なるが、俄にかき曇り、ふる雨車軸を流しける。酒宴興を失いをりふし、虚空にしはがれ声していかに板垣、(3)さきに我等が腹を何とて蹈みわりけるぞ、懺悔せよとよばはりける。

（以下略）

駿河の国板垣の三郎道げんの物に命をとられし事

駿河の国の住人に儀本といふ人あり

あるよのつれ〴〵に家の子らうどうをあつめしゆゑんゆふけうをせられし折ふし儀本仰られけるはたれにしもあれ此内にせんげんの上のやしろまでとよひ行たらんやとの給へば、日ごろてがらをいふものどもおゝしといへども是はきこゆるましやうのすむ所なればたやすくみて参らんといふもの一人もなし。爰に甲斐の国の住人板垣の三郎とて代々ゆみやをとりてかくれなく、ふゆうのほまれある人ありけるが、それがし参らんと申、儀本なのめならずおぼしめてすなはちしるしを給はりければ、板垣は御前をたち、大こうの人なれば物ともせず、すぐに浅間へまゐられける。ころは九月中旬のことなれば月さへわたる森のうち嵐はげしき落葉のおとすさまじき山みちを心ほそくもすぎゆきて、上の屋しろの御まへにしるしを立をき帰られける。かかる所へいづくともなく白きねりのひとへきぬをかづきたる女ぼうに行あひたり。扨はおとにきくへんげの物我を心みんとおもふにやと板垣はしりかかるを、(2)かづきのきぬを引のけて見れば、まなこは一眼にてふりわけがみの下よりもならべる角はかずをしらずうすけしやうにかねくろくつけ、おそろしきことたとへいはんかたもなし。されども板垣はさはがずして、なにものなればとて腰の刀に手をかくればけすがごとくにうせにけり。板垣はしづかに立かへり儀本の御まへに参りしるしをたておき帰り候と申上れば、御前の人々板垣なればこそつゞがなくかへり候とをのをのかんじあひけり。扨めづらしき事はなかりけるかと御尋ねありければいやなにもなく候と申上る所にさしもくまなき月の夜にはかにそらかきくもりふる雨しやちくのごとく、はたかみなりおびただし。一座の人々儀本をはじめけうをうしなふ所にこくようしわがれたる声にていかに板垣ざんげせよ〳〵とたからかによばはりける。

（以下略）

引用の長きを厭えばこれでとどめるが、このあとは風雨はげしく吹きあれ、危難を感じた板垣を櫃（諸国百物語では長持）の中に入れ、夜の明けるのを待って蓋をあけてみると板垣の姿はなく、虚空でどっと笑う声がしたので走り出て見ると板垣の首を縁におとしておいたという。わずかの語句の他は異同のみられない部分である。

両者の比較をあえてこころみるのは類似を指摘するのが意図でない。先行作の説話をもってする怪談会のはなしらしいところをみようとするからである。怪談会といえども自己の経験を生のまま語ることだけではなかったであろう。時には身近かな怪談集に依存しながら語りすすめられたのではなかろうか。とすればその過程でいくつかのありがちな傾向を知ることが出来るはずである。

いうまでもなくその場合話者の関心は先行作の怪異の様態にある。それも表面にあらわれたところにひかれてそのさまを忠実にうつそうとする。そのため、表にあらわれない趣向などたとえそれが説話の核心にふれるものであっても往々見落されてしまうのである。即ち引用文に従えば「曽呂利物語」で板垣が上の社に赴く途中の変事（傍線(1)）は「諸国百物語」ではすべて省かれてしまっている。その結果板垣がもどって酒宴なかばにして俄かにあたりがかき曇り雨が激しく降る虚空から「いかに板垣さきに我等が腹を何とて蹈みわりけるぞ懺悔せよ」という個所の（傍線(3)）の「さきに我等が腹を何とて蹈みわりけるぞ」の部分が「諸国百物語」では当然省かれてしまうことになる。これではなにゆえに板垣が懺悔しなければならのか明かでないばかりか、実さいここが一話の核心であるだけにその趣向を生かすことが出来ないのである。

即ち板垣が非業の最期をとげなければならなかったのは、このへぎ板一枚（これは神慮にかかわるものであったであろう）を傲慢にも踏み割った報いによるものである。そうした肝腎の個所をすべて省きながら、「諸国百物語」は表面にあらわれた怪異の様態をば忠実にうつし伝えているのである。（傍線(2)）。こうしたことは作者の著作態度の安易さを詰られるところかも知らないが、怪談会での話ということになればこれも一つの傾向として許されなければならない。

しかしいかに先行作に依存したからといっても話者は自らを全く埋没させてしまうわけにはゆくまい。そうしたときにもっとも安直な方法が末尾に付される評語なり感想なりである。「曽呂利物語」と「諸国百物語」の関係話をみると必ずそうした手法をみかける。巻一の例の板垣の話にも微妙なちがいがある。

板垣が首を縁上に落してけり。かかる不思議も有ることにこそ（曽呂利物語）

板垣がくびをゑんの上へおとして、そのすがたはみへずなりにけり（諸国百物語）

怪異の姿を明かにしない前者に対して後者はその姿を認めたかにしるしている。こうして一座はまたその怪異の形相からはじまろうというものである。

そうした手法にはいろいろある。

○座頭辛き命助かりて斯くぞ語り侍るとぞ（曽呂利、三―一）

○座頭はあやうき命をたすかりやう〳〵都へ帰りけると也。此脇指三条小かぢがうちたる銘の物なるゆへにきどくありけると也。（諸国百物語、一―二）

○何事にもよらずよろづ高慢なるものわざはひに逢へることこれに限るべからず。（曽呂利、二―七）

○これより道珠日本一のをくびやうものとなりけるとなり。是も道珠あまりにかうまん有けるゆへ天狗のなすわざわなりけるとぞ。（諸国百物語一―三）のように怪異変化の由来を明らかにすることもあろう。また、

○前の友達に逢ひ爾々と語りければ、各手柄の程を感じける。彼の袋に入れたる物は如何なる物にかありけん知らまほし。（曽呂利、三―三）

○右の人々にはじめをわりを物かたりして件の袋をとり出して見ければ金子百両ありけると也。それよりのちは此塚なにごとなしといひつたへ侍るなり。（諸国百物語、一―七）

のように先行の話が明かにせずして伏せたところを暴露することもあろう。また自分で納得のいかない場合は「いかなるゆへともわきまへかたし」といい、「曽呂利物語」で離魂病によるというのも、それにかえて「かかるふしぎもあることにぞ」（巻一―十一）と不審のまま残そうとする。これまた怪談会での即興というべきで、いかにもその席に相応しいものといわなければならない。

はなしから文芸作品がつくられる。[注5] これは怪異小説の成立についてまず考えられるところである。しかしその作品から再び低次の話がつくられることもあったであろう。「諸国百物語」の場合がそれである。「曽呂利物語」によって成った「諸国百物語」そこには所謂文芸的成長のあとが見られると思いきや、事実はその反対でより素朴な話としての性格を見るのは比較に於いての通りである。

怪異小説をひもとくと類話と目されるものがきわめて多い。そしてその殆んど

が語句の改変や趣向の安易な変更程度のものである。類話が多いということも怪異小説の成立過程から明らかなことで、怪談会や御伽を背景として成立するという作者の言はそのかぎりでは素直にうけとられなければならない。「曽呂利物語」と「諸国百物語」の関係をたどれば、その感を強くするのである。

七

「諸国百物語」はのちに「諸国新百物語」という追従作を生む。元禄五年のことである。もっともこれは既刊の「御伽比丘尼」（貞享四年）の改題本であった。五巻にして二十二話、話数も百物語に忠実でなければ、「艶なるあり、哀れなるあり、をかしきあり、怪しきあり、恐ろしきあり」と話柄も怪談にかぎらなかった。従うところは「證拠正しき話」という点だけであったのである。

（注1）両書の関係については拙稿「怪談の係累」（北大近世文学研究会報・一六号）参照。

（注2）中村幸彦氏「秋成に描かれた人々」（国語国文・昭和三八年六月号）

（注3）顕原退蔵氏「近世怪異小説の一源流」（国語国文・昭和十三年四月号）

（注4）拙稿「曽呂利物語の表現―主として御伽物語との関係から」（可里婆祢・五号 一九六五）

（注5）拙稿「怪談会から怪異小説へ」（国語国文研究・二四号・昭和三八年二月）